

敬神園の常夜灯はどこにあったか？

昭和61年(株)国書刊行会発行「写真集 明治大正昭和 伊勢二見小俣」P.16「23.敬神園の常夜燈」によると、

倭町の天理教三重互助園の南高台に、2基の常夜灯があり、御幸通りからよく眺められていた。(2基の常夜灯は)大正末期から昭和初期にかけて、ここにあった旅館敬神園が全国の神宮崇敬者から募った浄財によって建立したものである。その(=常夜灯が建立された)後、間もなく(昭和元年前後?)敬神園は廃業した。常夜灯は南海地震等で損傷を受け危険な状態であったが昭和46年に解体された。跡地には4階建ての市営住宅が建設されている。



常夜灯の位置は2つの地図に記載があった！



平成5年柴田 勉 作成「昭和15年ころの倭町の状況」
「大石どうろう(元敬神園の所持)」として記載されている



昭和41年ゼンリン地図にも灯籠マークがある。

従って、敬神園の常夜灯は2024年現在の団地角にあった、と言える。そして、昭和46年に灯籠が解体される前は農林省・警察の官舎が立っていて、解体後には、団地(4階建てビル=現在の建物かどうかは不明)になったか？

2024年現在の様子



廃棄物置き場の位置に「2基の常夜灯」、5階建てのビルの位置に「敬神園」はあった



T字路の東角＝この方向の丘陵地が「尾部山」



T字路の西角・・・この場所に「2基の常夜灯」あった



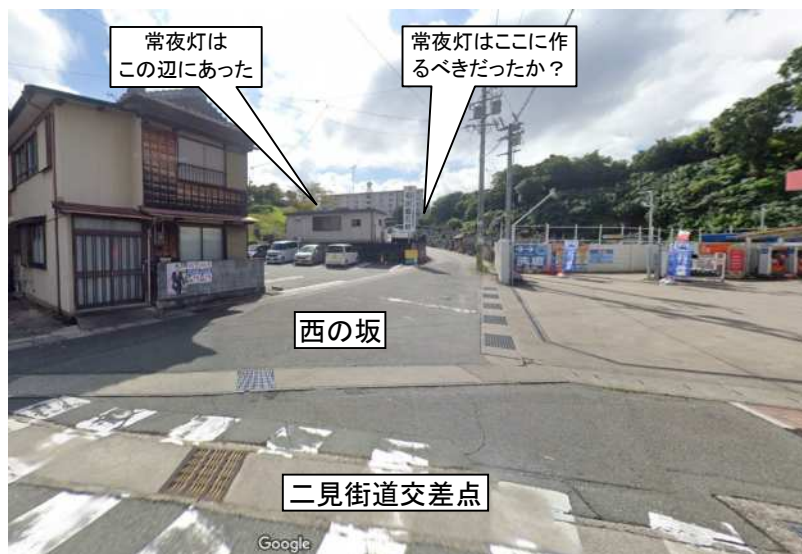
T字路の西角の続き 4階建ての建物が並ぶ



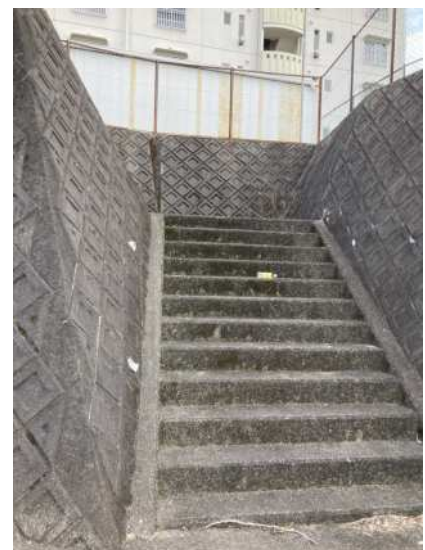
団地建物裏(＝現在の西の坂)

常夜灯はなぜ、この位置に建立されたか？

前述の写真集の記述によると、「常夜灯は御幸通りからよく眺められていた」という。2024年現在、御幸通り二見街道交差点からその方向を眺望すると、常夜灯は写真のように見える位置にあったということが分かる。また、尾部坂付近にお住まいの方からも、子供の頃(昭和46年以前)にこの常夜灯は尾部坂からよく見えたともいう。ただ、西の坂が主要な交通路だとすると、それに対して敬神園の玄関を、そして道標である常夜灯を、反対側の西角に作るべきではなかったかと疑問が残るが？



二見街道交差点から団地を望む



現在の西の坂の分岐点辺り(団地北西の角)

敬神園はどこにあったか？

伊勢の古市夜話 野村可通 著 P. 20-21 昭和51年出版には以下のように記述されている。

昔の常明寺山は神都有数の桜の名所で、春酩^{たけな}の頃は、古市女郎たちの遊宴の場であり、三味太鼓の音につれて踊り浮かれ、正に極楽浄土の境涯であったが、今は桜の木もほとんどなくなり、社祠も荒れ果て、昔を知る古老を嘆かせている。

常明寺山が神都第一の大伽藍を擁した大きな高丘地であったろうことは論を俟^{また}ないところではあるが、それが現在のように分断された時期は、明治40年から同43年にかけて完成をみた国道御幸通りの開通による変革に外ならない。それまでは、(古市から見て)北方の敬神園の山(後述)と地続きであり、倭町坂上から常明寺山に延びる道路も狭溢^{きょうあひ}(狭くゆとりがない意)で、今のように広いものではなかった。

また、それより神田久志本、河崎、二見へ出るには、主として西の坂によったのである。西の坂は、敬神園山の西を通過して御幸通りへ出る通路で、(反転して西の坂で南に向かうと、)左に西の坂(南に下ると丘陵地＝尾部山を抜け、間の山坂下＝現、ばらやん辺りの古市街道に出る)、尾部山(岩淵町字尾部山＝間の山坂下から北方向にある丘陵地をいう)、右に一嘗坊の墓地があり、今は雑草蔽^{かき}茂り、昼なお暗い、うす気味の悪い道路となっているが、昔は河崎方面への連絡路として、重要な道路の一つであった。

上記を図示すると「大正08年 宇治山田市平面図」の書き込みのようになるのではないかと(ということは、昔の河崎方面への連絡路は、現在の古市倭町三叉路を北上し、常明寺山にぶつかって左折して隠岡遺跡前・一嘗坊墓地を通過する二見道を言うのではなく、一嘗坊墓地左から尾部坂下に通じる道(西の坂)を指していると思われる。)

なお俗に敬神園山と呼ばれるのは、ここに日露戦争による戦没者を供養するという名目の下に全国から浄財を集め敬神園という当時としては立派な休憩所を建て、その(休憩所＝敬神園)前に大きな常夜灯2基を、出資者の名を刻んで建てたことからこの俗称(常夜灯の立っている場所が敬神園山?)になった。のち経営者によって閉じられ、建造物も間もなく取り壊された。そして現在(出版昭和51年頃?)は農林省団地、逓信省団地などの団地群となり、山(敬神園山?)は大きく変貌した。

さらに、敬神園という当時としては立派な休憩所を建て、その(休憩所＝敬神園)前に大きな常夜灯2基を建てた。(ということは常夜灯の後ろ(東向き)に玄関があったということであろう。)



大正08年 宇治山田市平面図 青丸が敬神園の建物の形状ではないか？

倭町坂上から常明寺山に延びる道路も狭溢で今のように広いものではなかったと書かれているので、常明寺山に切通しが出来る前、倭町坂上から元常明寺前を左折する二見街道 B より、西の坂(二見街道 A)の方が通行量は多かったのでしょうか？



昭和05年 宇治山田市近傍(図) 青○印は敬神園の建物なのか？

形状から建物はかなりの大きさだったことは推測できるが、残念ながら建物の写真等は発見されていない。

敬神園ゆかりの方からの話によると、敬神園の経営者は明治44年に住所を「倭町40番地」に変更しているので、敬神園のあった場所の住所は「倭町40番地」ではないかと推測しているが、この住所は現在でも同じ番地に団地があるので、この位置こそ「敬神園」のあった場所だと推測できる。



2024年現在「倭町40」は団地B、団地Cは「倭町40-1」

敬神園はいつ、開廃業したか？

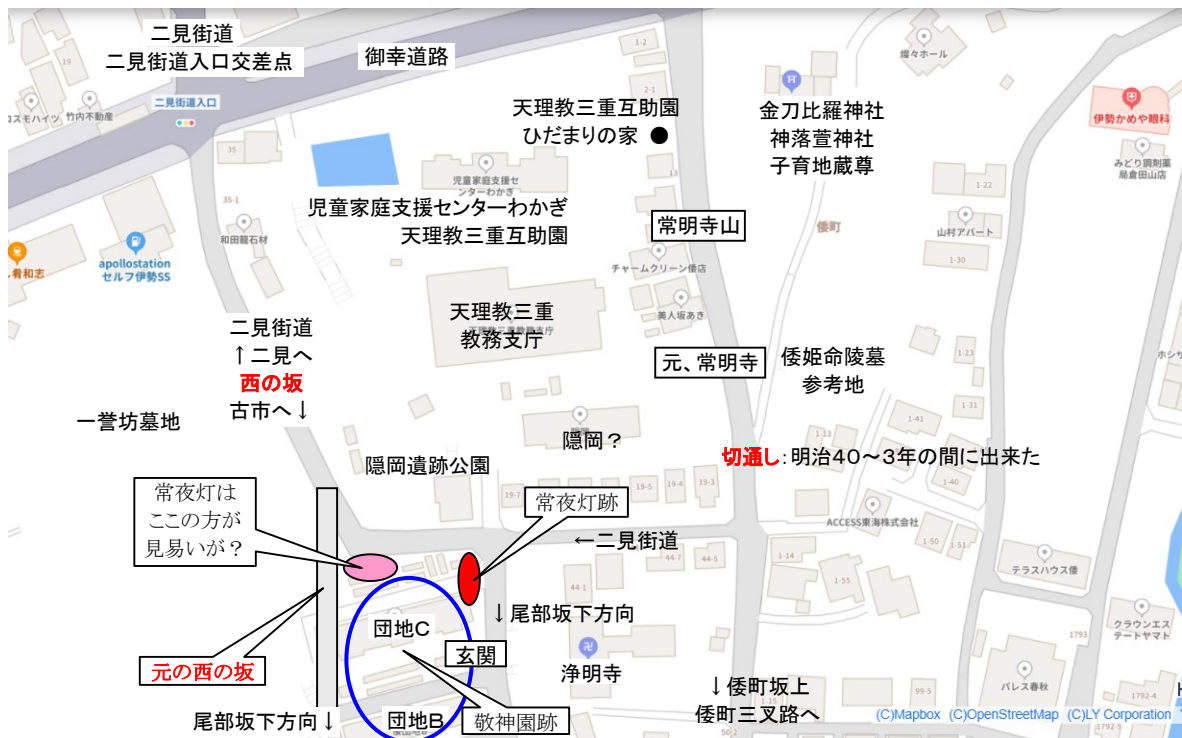
前述の通り、敬神園の経営者は明治44年に住所を「倭町40番地」に変更しているが、この時に居を構えた？あるいは同時に敬神園を建て始めた？、とすると、敬神園の開業は明治44年以後～大正初期の間、つまり大正元年前後ではないかと思われる。

敬神園は明治37～8年に勃発した日露戦争による戦没者を供養するという名目や全国の神宮崇敬者が宿泊する施設として創立しているが、この頃は日露戦争の反動不況で大変な不景気となっていて、古市の備前屋・杉本屋など大株も多くが経営に行き詰まり、資金力のある新しい経営者に店を売却し経営を交代した時期であったため、開業し易かったのではないかと？その後、大正3年にヨーロッパで第1次世界大戦が勃発すると戦争特需で好況は暫く続き、「成金」と呼ばれた人たちが登場したが、反面、インフレが急速に進んで「米騒動」が暴発もした。大正9年からは戦後恐慌となる激変の時代だった。

敬神園の廃業の時期に関しては、古市夜話によると、「のち経営者によって閉じられ、建造物も間もなく取り壊された」、とあるので、経営者が存命の間、つまり、大正7年前後までの間であったと思われる。従って、敬神園ゆかりの方のお話の「大正の初め頃に祖母(経営者の妻)が閉めたようです。」との話と整合性がとれる。しかし、写真集の「大正末期から昭和初期にかけて、ここにあった旅館敬神園」の記述とは相容れないし、廃業とともに建物が除却されたとも記述があるのに廃業を大正7年前後とすると、昭和05年版宇治山田市近傍(図)に記載されている建物は何か？疑問は残る。しかし、現段階での集約的結論としては、

開業は大正元年前後、廃業は大正7年前後までの短期間

としたい。そうすると、2基の常夜灯は廃業の少し前に建立されたということなので、その時期は大正5年前後か？敬神園廃業後は建物が取り壊され、戦前くらいまでは放置されたか(空き地→国有地?)、その後、農林省や警察の戸建て官舎が建てられ、さらに4～5階建ての市営団地(B、C)に建て変えられて現在に至るのではないかと？



2024年現在の周辺地図

まだまだ疑問が残るが少ない資料による推測である。(完) 2024.09.05